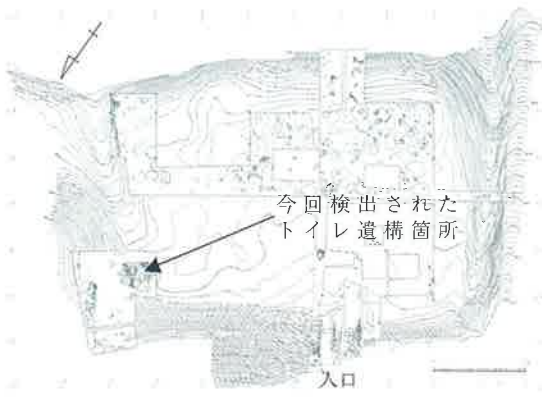


大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅴ

トイレ遺構について

生理上欠かせないのが、排便であり、それを行う施設がトイレです。しかし、トイレ遺構が発掘調査で確認できた例はあまり多くなく、その構造などはよく分かっていません。

J-14区の調査では、全国的に珍しいトイレ遺構を検出することができ、報道機関でも注目されました。今回は、このトイレ遺構についてご紹介します。



今回検出したトイレ遺構について

トイレ遺構は、僧坊跡の北東隅で検出しました。三方が4〜5段積みの石組み

の石室であり、その中に2個一対の踏み石が2基並べてありました。また、石室の隅では柱穴跡も見つかりました。この状況から、半地下式の堅固な石室に、柱を立てて屋根掛けをした2人用トイレであり、それぞれには仕切りのない構造であることが分かりました。15世紀初頭〜後半（室町時代〜戦国時代）に使われたものと考えられ、最後には人為的に埋められて、隣の僧坊へ行くための通り道に変えられたようです。

このような立派なトイレは、全国的にもあまり例がありません。なぜこのような構造かについては、冬の2mに及ぶ積雪に閉ざされる環境下にあるため、半地下式にして屋根掛けをしたのではないかと考えられます。

トイレ遺構の位置について

トイレ遺構は、僧坊の入口の東側に位置し、僧坊の表側にあると言えます。なぜこのような目立つ箇所にトイレを設けたのでしょうか？

戦国時代に日本に來たポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは著書「大航海時代叢書」の「日欧文化比較」において、トイレの文化比較を行っています。「われらの便所は、家屋の後方の、人目のつか

ないところになければならない。彼らは前方にあり、みなに開放されている」「われらは糞尿を運び去る人に金を支払う。日本ではそれを買う、その代償に米と金を支払う」「ヨーロッパでは馬糞を菜園に、人糞を塵芥捨場に捨てる。日本では馬糞を塵芥捨場に、人糞を菜園に捨てる」と述べています。表側にトイレ遺構を設けたのは、堆肥として運び出し易い位置を選んだ結果と考えられそうです。

トイレの土を調べてみて

2個の踏み石の間は、地山が掘り窪められており、東側ほど深くなっていました。空間的にはそれほど多くを溜める構造になっていませんでした。この中の土の一部を取り上げて、どんなものが含まれているのか、科学分析を行いました。

通常ではトイレ遺構内の土からは、当時の衛生環境を反映して寄生虫卵が多く含まれていると言われています。残念ながら分析結果では寄生虫卵は見つかりませんでした。ヒユ・アカザ科の花粉が検出できました。ヒユ・アカザは平安時代の医学書に、穂を腹痛や虫下しの薬として用いるという処方が載っており、トイレ遺構でよく検出される花粉です。これらの状況から、糞尿の処理については、樋箱（オマルのような簡易汲取り式のもの）を併用して使用したのではないかと考えています。



現存する室町時代のトイレ

京都市・東福寺には室町時代の東司と呼ばれるトイレがあり、重要文化財に指定されています。境内の南西隅（表側）に位置する長棟の建物内に、埋め糞（便壺）が約20mにわたって2列に設置されています。俗に「百雪隠」と呼ばれ、それぞれには仕切りはありません。規模や構造は異なりますが、今回検出したトイレ遺構と共通する要素があり、当時の寺院のトイレに対する価値観の表れと考えられます。

当時の僧侶の生活は、厳しい戒律に基